

石ノ森章太郎を辿る (宮城県登米市)

伊藤 景

「トキワ荘」ブーム

石ノ森章太郎の生い立ちについては、二〇一八年八月二十五日の第四十一回「二十四時間テレビ 人生を変えてくれた人」(日本テレビ)内で放映された「ヒーローを作った男 石ノ森章太郎物語」のおかげで、今では多くの人が知っている。しかし、二〇一八年以前は「石ノ森章太郎研究をやっています」なんて

言おうものなら、「へえ、ずいぶん古いマンガ家だね」と言われるか、「そいつは誰なんだ?」と言わんばかりの微妙な笑顔を浮かべられたものだ。そんなときは、「仮面ライダーとかゴレンジャーとかの原作を描いた人なんですよ」と一言付け足すだけで、相手は「ああ! ああ! へえ、あれって元はマンガだったん

だ」と満面の笑みで頷いてくれる。今では、「この間、二十四時間テレビでドラマになった人ですよ」と言うだけで、わかってもらえるので、お互いに気まずくなるやりとりもほとんどなくなった。やはり、メディアの力は偉大であり、未だに「テレビの力」は存在しているのだろう。

メディアの力によって、現在は石ノ森章太郎だけでなく「トキワ荘」自体が注目を集めている。トキワ荘とは、東京都豊島区にかつて存在していたアパートの名前である。ここは手塚治虫をはじめとして寺田ヒロオや石ノ森章太郎、赤塚不二夫、藤子不二雄の両名といったように戦後マンガを牽引してきたマンガ家達が多く住んでいたアパートだ。マンガ家やマンガファンからすると「聖地」として扱われている。しかし、この聖地も一九八二年に老朽化のために取り壊され、跡地には出版社が建ち、トキワ荘は完全に姿を消した。聖地は約四十年も前に失われているにもかかわらず、今年だけで「トキワ荘」という名前をどれほど目にしただろうか。テレビ番組や雑誌、SNSといったようにメディアを問わず、この名を目にするようになった

のは、「トキワ荘」が「豊島区トキワ荘マンガミュージアム」として東京の地に復活したからだろう。

このように、最近では「トキワ荘」がちよっとしたブームになっている。トキワ荘に住んでいたメンバー達のゆかりの地を紹介するマップもよく目にする。私自身も「聖地巡礼」として八年ほど前にトキワ荘の周辺をうろついたことがある。そのときには、跡地にトキワ荘を模したモニュメントがあったり、今ではトキワ荘マンガミュージアムが建っている公園でもある南長崎花咲公園の「トキワ荘のヒーロー達」と名付けられた記念碑が存在するくらいであった。この公園も、今では「トキワ荘公園」と呼ばれているらしい。私はまだトキワ荘マンガミュージアムには足を運べていないのだが、特集記事なんかを読んでもみるとトキワ荘の再現度は高いらしい。

石ノ森を研究する上で、トキワ荘は憧れの地であるとともに、すでに失われた地でもある。トキワ荘が取り壊された今、彼が生活した場所を体感することは二度とできない。そういった意味では、石ノ森章太郎研究において重視すべき地は、東京都豊島区よりも宮城

県登米市であるといえる。そこは、石ノ森が幼少期を過ごした地であるとともに、未だに彼が生活していた

石ノ森章太郎生誕の地、宮城県登米市

宮城県登米市は宮城県の中でも岩手県との県境に位置している。ここで、石ノ森章太郎は生まれた。宮城県石巻市に彼の作品をテーマにした「石ノ森萬画館」があるため、そちらが出身地だと思われることが多いが、石ノ森の出身地である登米市には「石ノ森章太郎ふるさと記念館」があることから、登米市が彼の出身地である。かつて存在した宮城県登米郡石森町が石ノ森の生誕の地であり、ペンネームの由来の地でもある。

私は今までに三度、この地を訪ねたことがある。初めて訪れたのは、二〇一五年十二月。修士論文のフィールドワークの一環として訪ねた。石ノ森の「ジュン」シリーズを研究対象とする上で、彼の故郷をどうしても自分の目で見ておきたかったのだ。当時は、偶然にも

環境が残っているからだ。

姉が宮城県で一人暮らしをしていたこともあり、車で登米市まで向かうことができた。ひたすら国道三四六号を北上し続けるルートで、仙台市付近の姉の家から一時間以上かかった覚えがある。このときは、石ノ森章太郎ふるさと記念館が目的地であったのだが、向かうまでの道中は刈り取られた後の田んぼを目にしたことを覚えている。登米市はササニシキなどのブランド米を扱う田園の町でもある。

記念館に車で向かうのなら、仙台駅からは基本的にまっすぐ北上していけば辿り着くことができる。姉が宮城県に住んでいたときは、それで良かった。しかし、現在は宮城の地を離れ、一児の母でもある姉に対して気軽に「登米市に行こうよ」とは声をかけづらい。私は石ノ森章太郎の作品に傾倒し、研究し、論文まで書

いてはいるが、家族はそうではない。もつと言えば、石ノ森作品に全く興味が無い。両親は、「世代」ではあるが、アニメ作品のタイトルにいくつか聞き覚えがある程度である。こうなると家族を巻き込むことも難しく、特に目玉となる観光地もないので、友達も誘いづらい。これは、一人で行くしかない。

私は運転免許を持っていないので、交通機関として「車」は選べない。そうなると、交通公共機関を使うしかない。どうしたら、石ノ森ふるさと記念館まで辿り着けるのか。記念館のホームページには、JR東北新幹線をご利用の場合として、仙台駅で東北本線に乗り換えて石越駅まで行き、石越駅で市民バスに乗り換えてふるさと記念館の停留所を目指すルートと、仙台駅前から出ている高速バスで登米市役所前まで向かい、そこから市民バスに乗り換えてふるさと記念館の停留所を目指すといった二つのルートが紹介されている。宿泊する予定がないのであれば、仙台駅から石越駅まで向かう方が良さだろう。電車の本数は多くはないが、ダイヤが乱れることは少ないので、旅行の計画が立てやすい。また、仙台駅付近で宿泊するのであれ

ば、ホテルだって選び放題だ。

しかし、私は記念館を心ゆくまで堪能しなかった。開館から閉館まで居座りたかった。そうすると、記念館の近くに宿泊する必要がある。宿泊を考えると利用できる交通機関は、高速バスとなる。記念館付近で宿泊できる施設は、徒歩圏内にはないからだ。ここでも、運転免許がないことで、行動が制限されてくる。学生のうちに取得しておくべきだったなと愚痴を吐きつつ、宿泊施設を探してみると、登米市役所周辺であれば、いくつかホテルが建っていた。このエリアに泊まるのが、記念館を堪能する上では効率的といえるだろう。

石ノ森章太郎ファンクラブの会員の方には、「ホテルニューグランヴィア」が、登米の中ではおすすめのホテルであると教えてもらった。早速、予約しようとする。こちらのホテルは予約が埋まっており、諦めるしかなかった。人に会う約束があったので、日にちを動かすことができず、なんとか予約が取れたのが「ビジネスホテル サンフレックス」であった。サンフレックスも値段の割には広くてきれいな部屋だった。ただ、こちらのホテルの周辺は飲食店等はないので街

灯が少なく、夜になると真っ暗になる。夜遅くまで歩くのであれば、飲食店が近いエリアのホテルの方が良いかもしれない。まあ、泊まれる場所があるだけでありがたかった。

仙台駅までは、新幹線で東京駅出発なら約二時間半で到着できる。乗り物酔いが酷い身からすると、この距離はまだ楽しむことができる。慣れ親しんだ仙台駅に到着してから、高速バスの乗り場を慌てて探す。駅にさえつけば、すぐに、バス乗り場に辿り着けるのではないかと考えていたが、見つからない。仙台駅は新幹線乗車口が基本的に二階にあり、普段は商業施設をウロウロしてから地上に降りていたので、仙台駅周辺には詳しくない。そのため、地上階にはあまり慣れておらず、タイムロスが発生した。何も考えずに二階から降りてみたところ、高速バスの乗り場である「旧さくら野百貨店仙台店前」から遠い場所で降りてしまった。片手にスマホを握りしめ、もう片手ではスーツケースを引きずりながら、乗り場まで猛ダッシュ。登米市役所行き的高速乗合バスは、予約不要の自由席なため、バスの到着にさえ間に合えば問題はない。ひい

日の朝早くに石ノ森章太郎ふるさと記念館に向かうことにした。登米市役所から市民バスでふるさと記念館前まで乗れば辿り着けるのだが、いかんせん本数が少ない。ちょうど良い時間帯のバスがなく、いつそのことと歩いていくことにした。時間にして、約一時間。石ノ森も、登米市役所のエリアとは少し離れているが、登米市の佐沼高等学校まで、実家から毎日通っていたことを思うと、この道も彼が歩いた道かもしれないと胸踊らせたものだ。だが、そんなときめきも長時間は続かない。ひたすら田んぼの続く平坦な道は、見通しが抜群で、だからこそ目的地までの遠さもわかってしまう。黄金色の田んぼが広がっていれば、少しはテンションも上がってくるが、ちょうど刈り入れ中だったため、どこかミレーの『晩鐘』のような物悲しさが胸に迫ってきたものだ。朝早いため、霧に包まれた田舎道は、まるで私を中心に世界が存在しているかのような錯覚を起こしそうなくらい孤独を感じた。日が出てきて、霧が晴れてくると、急に世界は活気付く。住宅地のエリアに入ると、祭りの準備のために男性陣が幟を立てたり、木にしめ縄をくくりつけていたりする。

ひい言いながら、辿り着いたときには、バスはまだ到着していなかったため自動販売機に行く余裕ができた。この高速バスはチケットの購入を事前にしなくても、バス内で現金であれば乗車賃を支払うことも可能だ。降りる際に、運転手さんに直接支払うスタイルは、私にとっては初めての体験だったので少しドキドキしたものだ。私の他にも、五、六人がこのバスには乗っていたのだが、運賃を支払う際に片道分だけ支払ったのは私だけだったようで、「往復でなくて大丈夫ですか？」と聞かれた。そのときは、帰りは石巻を観光してから仙台駅に向かおうと計画していたので、「片道で大丈夫です」と答えたが、今になってあのときのやりとりを振り返ってみると、どうみても観光目的の人間が、帰りの券を買わないのは心配だったのだろう。結局、帰りは高速バスを使わず、無事に石巻駅から電車で仙台駅まで戻ってきたので、帰りの切符は必要なかった。それでも、あのとときの「心配です」とあからさまなまでに表情に出ていた運転手さんの顔は忘れられない。

到着したその日は、登米市役所付近を散策して、翌

まるで石ノ森作品の「龍神沼」みたいな景色がそこには広がっていた。住宅地に入ってから、記念館までは少し距離がある。黙々と歩き続けると、記念館よりも先に石ノ森の生家が目に入る。生家が見えれば、石ノ森章太郎ふるさと記念館はもうすぐだ。

基本的に記念館に入る前には、隣接している「Cafe たばこや」で昼食を済ませるのが私のお気に入りコースである。このお店は、記念館周辺の唯一の食事処であり、ここ以外には座ってゆっくりと食事ができるところはなかったと記憶している。しかし、残念ながらこのお店は、今年六月に閉店してしまった。ここで食べたササニシキを使った牡蠣味噌入りのおむすびと東北地方の郷土料理である「はっと」はもう食べられない。小腹が空いたときに、ここで食事をしていただが、今後はそれができなくなってしまった。萬画館であれば、館内に展望喫茶「BLUE ZONE」があり、そこで企画展とのコラボメニューや通常メニューとして食事も甘味も楽しむことができる。また、少し外に出れば地元のお店を使ったたくさんの飲食店が並んでいる。しかし、記念館には館内に萬画館のよ

うな食事を提供している場所はない。飲み物に関しては、記念館の前に石ノ森作品の様々なキャラクターが描かれた自動販売機があるので、そこで入手すること

石ノ森章太郎ふるさと記念館

石ノ森章太郎ふるさと記念館は、七月から八月の間だけ午前九時から午後六時まで営業している。私が行ったのはこの期間ではなかったため、開館時間は午前九時半から午後五時までとなっていた。姉の会社の先輩いわく、記念館は一時間あれば十分楽しめるらしい。私は、初めて行ったときは、企画展と常設展を合わせて三時間も同行した家族連れ回したものだ。

記念館では年に二回か三回程度、特別企画展が開催されている。そのうちの一回は必ず石ノ森に関連した企画展である。私が初めて行った時には、第五十一回の特別企画展「伝説の『トキワ荘』寄せ書きカーテン 北原照久レトロおもちゃ・マンガ展」が開催されていた。トキワ荘のマンガ家達を中心に結成された「新

が可能だ。これからは、記念館に向かう前にご飯を調達しないと体力が保ちそうにないなあ、などと勝手に悩んでいる。

漫画党」のメンバー達が、結成の記念として寄せ書きをしたカーテンがメインに展示されていた。遠くから見ると小汚いカーテンなのだが、近づいて「絵」が見えてくると価値が変わってくる。マンガ家達それぞれのタッチで自由に描かれており、得意とするジャンルは異なっている。「新漫画党」としてのまとまりを感じる「カーテン」だった。二度目に訪れた際は、第五十三回の特別企画展「手塚・石ノ森ヒーローズ」、三度目に訪れた際は、第五十九回の特別企画展として石ノ森の「大江戸相撲列伝」とちばてつやの「のたり松太郎」の原画が展示された「大相撲マンガ場所展」が開催されていた。

念館の展示のいいところは、原画を惜しげもなく展

示していることだろう。最近の展示会では、精密な複製原画ばかりが展示されており、原画自体は僅少なんてことも多い。しかし、記念館で展示されているものは、そのほとんどが原画であり、複製原画の方が少ないくらいだ。これは「石ノ森萬画館」も同様で、常設展示として「原画展示コーナー」が設けられている。一年に四回ほど展示内容が変わるため、目当ての作品が展示されるときには、予定を無理矢理に空けてでも、萬画館を訪れるのが常だ。

特別企画展以外にも、記念館では常設展示として一年を通して石ノ森の作品に触れることができる。ふるさと記念館は、石ノ森の作品を楽しむことに特化した萬画館とは異なり、「石ノ森章太郎」自身がテーマとなっている施設である。

また、常設展では、原画の展示も行なっているが、石ノ森のトキワ荘時代の居室を再現した展示ブースも見応えがある。今では、「豊島区トキワ荘マンガミュージアム」で、トキワ荘の住人達の居室が再現されているが、それ以前に彼の部屋を再現したものはここ以外では常設展示として見ることはできなかった。

自伝的な作品なんかで描かれたものは、よく見ていたが、やはり二次元と三次元では大分印象が異なる。特に、印象に残っているのは、本棚から溢れ出る書籍の姿だ。石ノ森は、夜寝る前に最低一冊は本を読んでいたと自伝などで語っているほどの読書家であり、かなり濫読していたタイプである。本棚には収まりきらずに、乱雑に積まれた書籍の姿に、石ノ森作品の源泉を窺うことができる。また、再現ブース以外にも、石ノ森の愛用品の実物が展示されていたり、彼のことを慕ったマンガ家達が彼の画業四十五周年を記念して扇子に描かれたサインもずらりと並んでいたりと、圧巻な光景が広がっている。他にも、「生家の秘密」と名付けられた石ノ森作品のキャラクターが配置されたジオラマや彼の関わった映像作品やマンガ作品の閲覧コーナーも充実している。

常設展の最奥にはビデオシアターが併設されており、記念館でしか見ることのできないオリジナルアニメーション『小川のメダカ』が上映されている。この作品は、『週刊マンガアクション』（双葉社）の一九八一年十月一日号に掲載された短編「小川のメダカ」がベ

スとなっている。マンガでは、テレビやゲーム漬けの息子達の「情緒」を心配して、自分の田舎の生活を体験させようと石ノ森は試みるが、故郷はすでに「小川」に「メダカ」が棲んでいたような場ではなくなっており、彼の目論見は失敗する。しかし、息子達がSF映画『イルカの日』を見ながら涙する姿を見て、時代によって「情緒」の育み方は変化するものなのだと自身が納得するといった作品となっている。大まかなストーリーは同じだが、マンガ版よりも故郷に対する思いや、創作に対する石ノ森の心理描写に時間をかけて作られているのが『小川のメダカ』といえる。特に四季の表現が美しく、秋の落ち葉が舞い上がる中で彼の作品である「ジュン」シリーズの主人公・ジュンの佇む姿は、息を呑むほど美しかった。声優陣もなかなか豪華で、石ノ森章太郎の声は山寺宏一が担当し、息子達の声は三田ゆう子、かないみかが担当している。こちらの作品は、VHSも存在するが、現在は一般流通していないので、基本的には記念館でしか見る事ができない作品となっている。こちらの作品はビデオシアターで一日に何度も上映されているので、記念館

に行った際には私なんかは居座り、彼の作品世界に没頭している。『小川のメダカ』は石ノ森作品の中でも、特に上質なアニメーション作品なので、多くの人に見てもらいたいものだ。

石ノ森章太郎ふるさと記念館は、二〇〇〇年七月に石ノ森の生家と程近い地に建設された。記念館から歩いて、十分もかからない場所に彼の生家が残っている。石ノ森の家は、祖父母の代には酒を取り扱う商家だったが、石ノ森が生まれたときには酒の取り扱いはなく、味噌や醤油、切手や葉書などの「専売もの」を取り扱う店となっていたこともあり、この地域では裕福な家庭に育ったといえる。商売をしていた家だからか、玄関の部分が大きい。十人くらい入ってもまだ余裕がありそうだ。生家は、現在一般開放されており、中に入って見物することができる。玄関付近には、ショーケースには石ノ森が原作を担当した特撮作品の人形が飾ってあったり、幼い頃に石ノ森が遊んでいた木馬や、彼が愛用していた卵型の椅子なんかも展示されている。石ノ森の自伝にもよく登場する広い居間には、幼い頃のエピソードがパネルで紹介されていたり、石ノ森が

読んだとされる書籍や数多くの写真パネルが展示されている。他にも、若くして亡くなった姉が作った人形も展示されており、小野寺家が子ども達に対してそれだけ愛情深く接してきたのかを垣間見ることが出来る。上京し、もう戻ってくることもなかったはずの彼の部屋には、中学生時代に作った松笠を使った作品が展示されていたり、当時使用していた勉強机と電気スタンドも展示されている。机の上には、石ノ森が授業で製作した本立まで残っている。彼だけの部屋が存在していたことから、長男として大切に育てられたことがわかる。そして、長男として期待もされていたことだろう。上京してマンガ家になることを父に反対されていたと石ノ森は語っている。だが、彼の落書きままで保管されているような家を見ると、自伝で語られているような「親」の姿が石ノ森の視線で語られた姿であり、本当は応援していたのではないだろうか。生家を見なければ、石ノ森の言葉を鵜呑みにしてしまうところだが、「空間」が残っていることによって、「言葉」だけでは伝わらない思いみたいなものを体感でき

た気がした。

石ノ森章太郎ふるさと記念館をプロデュースした原孝夫は、石ノ森の『絆 不肖の父から』（鳥影社）で「お隣、石巻 萬画館」とのすみ分けに一番気を遣った」と語っている。そのため、こちらのコンセプトは「石ノ森の魂は故郷にある」として、この地に建設したそうだ。記念館の庭には、「町おこし人おこし」から始まる石ノ森の言葉を彫った石碑が建っていることから、石ノ森がこの地を盛り立てていきたいと思っていたことがわかる。ちなみに、石碑には次のように彫られている。

町おこし人おこし

町は一人ではおこせませんが

人は一人でもおこせます。

おこすとは 興すであり

熾すであり 起す、です。

一人一人の魂の覚醒こそが

町おこしの第一歩であり、皆さんの役目であります。

マンガや石ノ森章太郎という人物に対して、興味がない人はとことん興味がないだろう。そんなものがあるのかと、知ることすらないかもしれない。しかし、この施設はマンガや石ノ森作品に興味がなくても、地元の人が集う場である。特に、冬恒例の「光のページェント」には、多くの人が気軽に記念館に足を運ぶ。姉の元同僚の人は、記念館のことを「イルミネーションがきれいなところ」として認識していたくらいだ。私は、記念館のあり方はそれでも良いのではないかとと思う。マニアにしか知られず、閉ざされた空間として存在しても、それではマニアが消え去ったときには、その「空間」自体が失われてしまう。それよりは、町おこしの一環として、多くの人に存在を認識されることの方が重要だろう。そうしなければ、記念館という「空間」だけでなく、町という「場」も失われてしまう危険がある。

石ノ森は、ペンネームを故郷の「石森町」からとり、町が登米市に合併することになり、「中田町」となったことで、町としての名前が消えてしまった際には、自分がこの名前を東京に持ってきてしまったからでは

ないかとこぼすほどに、この町に愛着があった。「石森」は町の名前としては「いしのもり」と読む。石ノ森自身は改名以前の「石森章太郎」の「石森」は「いしのもり」であると認識していたが、周りの人々からは「いしもり」と呼ばれていた。本人も特に訂正をしていなかったようで、「石森章太郎」時代の単行本は振り仮名も「いしもり」と振られているものがほとんどだ。しかし、彼は本来の読み方に戻すという意味でデビュー三十周年を機に「石ノ森章太郎」と名を改めた。一人だけ頑張っても、町は残らない。若者は、職を求め、刺激を求めて外の世界に飛び出していく。これは、町に限ったことではなく、「町」を「国」に置き換えても同じかもしれない。

その地に留まりたくなるような、あるいはその地に行きたくなくなるような魅力がなければ、すぐに「場」は廃れてしまう。現に、私はこの記念館と生家が存在していなかったら、登米市にまでは足を運ばなかっただろう。研究のためといっても、石巻市の石ノ森萬画館に行くくらいだったと思う。しかし、この地には石ノ森を育んだ環境が残っている。それは、何ものにも変

えがたい遺産だ。しかし、遺産は誰かが残そうとしなければ残らない。誰かが守っているから、遺産は「遺産」として存在することができるのだ。登米市の自然も、石ノ森の作品舞台も、今現在残っていることが奇跡であり、それは誰かの努力の上で存在する奇跡ともいえる。